

## アートプロジェクト作品研究—素材と表出—

大阪芸術大学 教養課程 講師 加藤 隆明

私の作品制作を分析するにあたり、プロジェクトと言われている作品の構造は重要なことである。よってアースワークから現在のアートプロジェクト作品を確認することにした。それと、じしんの制作過程では2000年から展開したブタ皮を素材にした彫刻作品、その制作手順を明確にし、プロジェクトという概念と照らし合わせながら考察した。

現在国内外で数多くのアートプロジェクトが行われている。モダニズムアートが隆盛時、作品はアトリエで制作後完成した作品は美術館やギャラリーで展示をするという過程があった。そのように制作と展示は別な場所で行われている。そしてこの時代の美術にはプロジェクト概念はなかったと思われる。その中でプロジェクト作品に近い要素と思えるものに野外彫刻がある。今でも身近にあり、特に駅前などに設置されている。それは駅前彫刻と揶揄されてもきた。野外彫刻は戦前戦後で様子が異なるが、戦後は文化復興や平和のシンボルとして設置されてきている。これらの作品構造には現在のアートプロジェクト概念はないと思える。ただ、作品を一定の地域に数年間かけてテーマをもって設置していく「芸術計画」をプロジェクトと考えることもできるが今回はこの「芸術計画」については考慮していない。

私が学生であったころ(1970年後半)クリストの「制作中」という映像資料と出会い初めてアートプロジェクトという形式を知った。膨大な費用と時間、社会的約束事や法律と隣接し克服、関係場所に所属する人々に作品の内容を説得、そして参加を可能にすることで彼の作品は空想から現実となる。このプロジェクト作品は展示限定のものでいずれ撤去させる。これらの一連の作業が作品として重要で、アトリエから美術館への作品とは大きく異なるのである。このクリストの芸術行為以降プロジェクトというものが注目されてきたと思う。

私じしんも1980代には展覧会のプロジェクト企画として行われた「架空通信テント美術展」や「創造の森野外展」に参加している。しかしこの頃はその場での現地制作だけでなく野外に展示し直してみた作品とかもあり、構造的にプロジェクト作品でないものも多かった。

現在の状況としてプロジェクト作品の展覧会というものは、国内でも数多くの場所や地域で行われお祭りの雰囲気になっているように思える。古い町並みでのアートプロジェクトでは地域の物語を復興させるような仕掛けの作品群、都心ではカーニバ

ル的に人々のエネルギーの発散場所的な雰囲気街を変容させている。それに行政が関係し経済効果を高められるようなアートイベント化の様子がある。また、北陸地域の名所旧跡に地元の高校生が作品を展示するというプロジェクトもあり、経済的効果だけでなく教育的効果も狙っていることが分かる。

作品を見るということにも触れておかなければいけない。ここで忘れていけないのは鑑賞者の存在である。美術作品は形式ごとに鑑賞の方法、見方を変える必要がある。また美術館での鑑賞と街中での作品鑑賞とは大きく異なるということである。つまり作品は観客と良い関係ができこそ、作品とあるいはプロジェクトと一体化できるのではないか。つまり近年のプロジェクト作品は鑑賞時にその見方や作品テキストが手渡されそれを参考に作品を体験しなくてはならない。

じしんの作品制作に戻る。人との関係性を作品化できないかと考えたのが2000年からの作品である。素材である皮膚は真皮という部分で半透明感がある。それは商品として販売されている(現在販売中止)。それを同質の紐上の素材で縫って立体作品にするのだが、この作品の制作過程にプロジェクト的要素を介入させた。制作手順をシステム化し個人の作為を他者によりずらすことで「私だけではない」ものへと作品が向かうことを思考していた。制作手順としてある形を想定する。それを発泡スチロール等で制作し表面を和紙で覆う。その後私ではない誰かに、木工ボンドを手塗ってもらいそのモデル表面を撫でまわしてもらい。木工ボンドが硬化したときその人の掌の痕跡が表面に残る。それを私が痕跡に沿いながらあるいは抗いながら私の痕跡を残す。その痕跡を線でつなぎパートとしそれぞれを縫うことで型をベースとしながら縫い痕の明確な彫刻ができる。これを新たな人達と制作を続ける。その差異から、同じ型からも特徴あるひずみの複数の立体作品を展示した。詳しくは別提出物に掲載する。